

照屋佳男教授古稀記念号発刊の辞

社会科学学会会長

大西 泰博

照屋佳男先生は、社会科学部が創設された七年目の一九七三年に社会科学部の専任講師となられ、その後三十四年の長きにわたって、社会科学部のために多大のご尽力をいただきましたが、本年三月をもちまして、定年のためにご退職されました。

先生は、学部におきましては、英語教育に力を注がれるとともに、「文学」や「近代化論」の講義科目を担当され、また大学院におきましては「比較文化・比較近代化論」の研究指導にあたられ、多くの学生・院生から尊敬され、慕われてまいりました。

先生は、近代化論を語られる中で、常に「かけがえのないもの」の大切さを強調されていたように思われます。このようにいとも簡単に、先生のお考えを述べてしまうことは、はなはだ失礼なこととは思いますが、とても温厚な先生であればこそ、こうしたことも許されるような気がし、浅学菲才をも省みず、あえて述べさせていただきました。先生は最終講義でも、社会科学のあらゆる領域を縦横無尽に語りつつ、やはり「かけがえのないもの」の大切さをお話されていらっしやいました。そして、このことは、わたくしたちに、今後の社会のあり方等に関しまして、重要な示唆となるように思われます。

先生の学問領域は、たいへん幅広く、時には政治に関する分野まで、研究の対象を広げられております。これは、人文科学や自然科学の先生方が社会科学部に赴任され、何かご自分の専門領域と社会科学との接点を見出し、それを実践していかなくてはならないという大変な使命感がおりになり、先生ご自身もこうしたことから政治にも目を向けられて、研究を続けられたと思われませんが、頭の下がる思いがいたします。

さて、先生は、学部におきましては、一九七四年から三年間、学生担当教務主任の役職につかれ、学部の困難な時期にいろいろご尽力いただきました。また、早稲田大学商議員を一九九四年から三年間勤められご苦労いただきました。

ここに先生の古稀をお祝い申し上げたいと存じます。また、これまでの社会科学部ならびに社会科学研究所におけます先生の多大なるご苦勞・ご尽力に対しまして、厚くお礼申し上げますとともに、先生がこれからはますますお元気に、ご活躍されますことを祈念いたしたいと存じます。

照屋佳男教授年譜・主要著作目録

年譜

昭和十一年十月二十二日 沖縄県中頭郡北谷村字玉代勢に、照屋正善・秀の次男として生まれる(屋号 照屋親雲上^{ペーチン})。

昭和十四年 マリアナ諸島テニアン島に国民学校訓導として赴任する父母、兄と共に移住。

昭和十八年四月 テニアン国民学校に入学。

昭和十九年二月 テニアン島に対する米軍の空襲激化のため、戦闘要員たる父をテニアン島に残し、母、兄、弟二人と共に、小さな木の葉のように揺れる木造船でテニアン島を脱出。二十日ほどかけて横浜着。同地に七日間滞在後神戸に向かう。神戸に一ヶ月滞在。

昭和十九年四月 沖縄着。北谷村北玉国民学校二年に編入学。

昭和十九年八月二十一日 九州に学童疎開のため、貨物船暁空丸に兄(国民学校四年生)及び七〇〇人以上の他の学童と共に乗船。僚船は、対馬丸、和浦丸。護衛艦は駆逐艦蓮、砲艦宇治。

昭和十九年八月二十二日二十二時十二分 米国海軍潜水艦ボーフィン号の襲撃を受ける。発射された一〇発の魚雷のうち四発が、暁空丸の左側を、二〇〇米ほどの距離を保って蛇行していた対馬丸に命中。二十二時二十三分ごろ対馬丸沈没。「乗船者のうち一四一人(氏名判明分)が犠牲になった。このうち学童の犠牲は七七五人。南西諸島近海では、一九四四年に入り米潜水艦による船舶攻撃が相次いでいたが、学童疎開船が標的にされたのは初めて」(沖縄戦新聞)第二号、琉球新報社)。

私たちの乗っていた暁空丸内では、警報を耳にするや否や、学童たちは、船倉から繩梯子を伝って一斉に甲板を目指した。甲板上は騒然とした状況。一心に神に祈りを捧げるお年寄りたち、学童をいつでも海に放り投げる事ができるようと、学童たちを一行に並ばせ、舷側で学童の両脇に立っている先生たち。対潜水艦攻撃に威力を發揮す

る爆雷を船尾から投下している兵士たち。「この船もそのうち沈められるから、今のうちに海に飛び込もう」と言
って、私の手足を引つ張る兄、それに必死に抵抗して、マストにしがみついている私（兄と私は、海上を漂う時に
サメにおそれないようにと、五米の白い禪を引きずり、首からは、漂流した場合の食料として鯉節を三本ぶらさ
げているという出で立ちだった）。恐怖のあまり脱糞する学童たち。「面舵いっぱい」「取り舵いっぱい」と大きな
声で叫び続け、船を蛇行させる船長。

昭和十九年八月二十四日 暁空丸、巧みな蛇行により米潜水艦の魚雷攻撃の回避に成功の後、長崎港着。後に爆心地とな
る扇屋旅館に六日間宿泊。

昭和十九年八月三十一日 熊本県八代郡日奈久町に到着。「命からがら長崎に上陸した疎開団一行日奈久班一千有余名は、
昭和十九年八月三十一日、夏休みも今日で終るという日に、日奈久国民学校の児童生徒職員その他町民多数の出迎
えを受けて、日奈久駅にたどりついた」（日奈久国民学校校長（当時）池田正著『沖縄の人・もの・自然』日奈久小学校）。日
奈久の地で町民のたいなる援けを受ける。以下『沖縄の人・もの・自然』から引用しつつ記述する。

「一千百名に及ぶ沖縄疎開学童を日奈久町に受け入れるということは、食料問題からいえば難事中の難事であつ
た」。極度の食料難の時代、しかも野菜類の夏枯れの八月九月に日奈久町は、各種団体をあげて、我々沖縄学童の
ために、南瓜や大豆や甘藷や柿などを懸命に集め、寄贈して下さったのである。当時は、農家といえども、供出
（政府が民間の物資・主要生産物などを一定価格で半強制的に売り渡させること）が厳しくて、余裕は殆どなかつ
た。そういう状況下で、難事中の難事がどうにか解決されたのは、共同体が生きていたからだ、今にして思う。

昭和二十年六月十五日 熊本県八代郡種山村（現在は八代市東陽町）字小浦に再疎開。福音寺なるお寺に宿泊。「今後は
食料もその大半を自給自足に待たねばならぬであろう」という池田校長先生の予測通り、飢餓に苦しむ生活が続く
（餓死者が一人出る）。餓死寸前の日々をどうにか潜り抜け得たのは、やはり共同体が生きていたからだと思う。共
同体に固有の美の発生に立ち合っているかのような経験も幾度もした。

例えばこういう事があった。我々が通っていた種山国民学校内ノ木場分校の担任の教師（築山房子先生）が、あ
る時、「照屋君はどうして身体を動かさないのでですか」と訊かれ、「身体を動かすとお腹が減るからです」と答えた
ところ、先生は「今晚先生の家にいらっしやい」と言われた。その晩お伺いすると、先生の家も厳しい供出で食料
難に見舞われていたにも拘わらず、薩摩芋を腹いっぱいご馳走してくださったのである。その時、先生は突然、絶

世の美貌の持ち主に変貌し、以後美人以外の人として先生を見るのが不可能となった事を今でもはっきり憶えている。

その築山先生との再会を、平成十八年七月二十六日十二時、私は六十一年ぶりに果たすことが出来た。先生がご存命なのか、東陽町に住んでいらっしやるのかもわからぬまま、ただ東陽町という地名と鹿兒島本線有佐駅という駅名だけを手がかりに、再会への旅に出た。

有佐駅でタクシーを拾い、東陽町を目指した。東陽町にかなり入ったところで、出会った最初の人に、築山先生の事を尋ねると、築山先生は、今は橋本姓で、東陽町の某所に住んでいるという信じ難いほど貴重な情報もたらされた。そばで聞いていた運転手は、その橋本さんなら知っていると勢い込んで言葉を発し、すぐさま先生の家へ向かう次第となったが、何か大きなよき霊の力の働きのようなものを感じずにはいられなかった。先生のお宅への滞りもなく到達できたのである。

「ごめんください」に応えて玄関に現れた御息らしき人は、突然の訪問の理由を知ると、老人会に出席中の築山先生を呼びに飛んで行かれた。家に戻って来られた先生は、私を一目見て、「ああ」と声をあげられ、六十一年前の教え子の照屋であることを直ぐに認められた。美しく老いていらっしやる先生と、お茶をいただきつつ過ごした感慨無量のひとときは胸に深く浸透した。その折、先生は幾度も「本当に、照屋君は小さくて、痩せていた。沖繩の学童はみな可哀相だった」という言葉を発せられた。この言葉に表されている惻隱の情は、六十一年前の先生と今の先生とをしっかりと結びつけ、生きている共同体がここにあるという思いを湧き起こらせた。

昭和二十一年二月 米国海軍軍艦にて沖繩への帰郷を果たす。

昭和二十一年四月 北谷村北玉小学校四年に編入学。

昭和二十二年四月 家出をし、九月までの六ヶ月間、米軍基地で米兵と暮らす。(当時沖繩の米軍は大雑把でおおらかであつたように思われる。)

昭和二十四年三月 北玉小学校卒業。

昭和二十四年四月 北谷中学校入学。

昭和二十七年三月 北谷中学校卒業。

昭和二十七年四月 野嵩高等学校(後に普天間高等学校と改称)入学。同年八月青少年赤十字運動のリーダーとして日本

赤十字社の招きを受け、本土へ渡航。一ヶ月間、主として日赤本社に滞在。

昭和二十九年十二月 米国新聞「ニューヨーク・ミラー」社（一九六〇年代に経営不振から廃刊）の招待で渡米。ニュー
ヨークで十二月九日開催された世界青年弁論大会に沖繩代表として参加。フランスの代表及びニューヨークの高校
生と親交を結ぶ。

昭和三十一年四月 普天間高等学校卒業。三十三年三月まで米軍兵士専用の酒場でバーテンダーとして働く。

学歴・学内活動

昭和三十七年三月 早稲田大学第一文学部英文学専修卒業。

昭和三十九年三月 早稲田大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了。

昭和三十九年五月 早稲田大学第二文学部助手（四十二年三月）

昭和四十二年三月 早稲田大学院文学研究科英文学専攻博士課程単位取得満期退学。

昭和四十二年四月 早稲田大学高等学院教諭（四十八年三月）

昭和四十八年四月 早稲田大学社会科学部専任講師

昭和四十九年九月 早稲田大学社会科学部学生担当教務主任（五十一年九月）

昭和五十年四月 早稲田大学社会科学部助教

昭和五十一年九月 早稲田大学社会科学部学生担当教務主任（五十二年九月）

昭和五十五年四月 早稲田大学社会科学部教授（平成十九年三月）

平成六年四月 早稲田大学院社会科学部研究科修士課程 研究指導・演習（比較文化論）担当

平成六年六月 早稲田大学商議員（平成九年十一月）

平成八年十月 全学審議会委員（第二次）（平成十年九月）

平成九年四月 早稲田大学院社会科学部研究科修士・博士課程 研究指導・演習（比較文化論）担当

平成十一年四月 早稲田大学院社会科学部研究科修士・博士課程 研究指導・演習（比較文化・比較近代化論）担当

（平成十九年三月）

学会

早稲田大学英文学会（昭和三十七年～現在）

日本英文学会（昭和六十年～現在）

早稲田大学社会科学学会（昭和四十八年～平成十九年三月）

著作目録

単著

『現代イギリス文学試論…文学と政治』、東京…エイジ出版、一九八〇年

『イギリス文学に学ぶ…文学と政治』、東京…エイジ出版、一九八三年

『ジョージ・オーウェル…文学と政治』、東京…行人社、一九八六年

『コンラッドの小説』、東京…早稲田大学出版部、一九九〇年

『文学と哲学のあいだ』（学際レクチャーシリーズ 8）、東京…成文堂、一九九一年

『文学から文化へ』（学際レクチャーシリーズ 11）、東京…成文堂、一九九三年

『共同体とグローバリズム』（学際レクチャーシリーズ 25）、東京…成文堂、二〇〇四年

『社会の再発見と社会の防衛』、東京…行人社、二〇〇七年

共著

『ジョイスの手紙——ポーラ・ローマ・トリエステ時代』（鈴木幸夫編『ジョイスからジョイスへ——ジェイムズ・ジョイス研究集成』所収）、東京…東京堂出版、一九八二年

『ジヨウゼフ・コンラッド——語り手の技法上の意義』（橋本宏編『英米小説序説』所収）、東京…松柏社、一九九二年

翻訳

J・G・カウエルティ『冒険小説・ミステリー・ロマンス (Adventure, Mystery, and Romance)』（第六、七章）〔共訳〕、

東京・研究社出版、一九八四年

ジョン・グレイ『ハイエクの自由論 (Hayek on liberty)』〔古賀勝次郎との共訳〕、東京・行人社、一九八五年

論文

- 一、チャタレー夫人の恋人 (ワセダ・レビュー第二号)、東京・学書房、一九六五年三月
- 二、『翼ある蛇』について (早稲田人文自然科学研究第十二号)、早稲田大学社会科学学会編、一九七五年二月
- 三、D・H・ロレンス晩年の思想 (早稲田人文自然科学研究第十三号)、一九七六年二月
- 四、D・H・ロレンスとヒューマニズム (早稲田人文自然科学研究第十四号)、一九七七年二月
- 五、ジョージ・オーウェルと知識人 (早稲田人文自然科学研究第十五号)、一九七七年十二月
- 六、影響力というもの——『息子と恋人』をめぐって (早稲田人文自然科学研究第十六号)、一九七八年十二月
- 七、狂信の誘惑——コンラッドの政治小説 (早稲田人文自然科学研究第十七号)、一九七九年十二月
- 八、意識の冒険——『虹』をめぐって (早稲田人文自然科学研究第十八号)、一九八〇年十一月
- 九、転倒した世界——『セイント・モー』 (早稲田人文自然科学研究第十九号)、一九八一年三月
- 一〇、圧制の病理——『恋する女たち』 (早稲田人文自然科学研究第二十号)、一九八一年十二月
- 一一、ジョージ・オーウェルと現代——『一九八四年』をめぐって (早稲田社会科学研究所第二十四号・早稲田人文自然科学研究第二十一号合併号)、早稲田大学社会科学学会編、一九八二年三月
- 一二、想像力と伝統の感覚——『ナーシサスの黒人』『台風』 (早稲田人文自然科学研究第二十二号)、一九八二年七月
- 一三、D・H・ロレンスの『黙示録』論 (早稲田人文自然科学研究第二十三号)、一九八三年三月
- 一四、若きロレンス——『白孔雀』をめぐって (早稲田人文自然科学研究第二十四号)、一九八三年七月
- 一五、イギリス中産階級の衰退——『ピルマの日々』をめぐって (早稲田人文自然科学研究第二十五号)、一九八四年三月
- 一六、生の悲劇的意義——『牧師の娘』 (早稲田人文自然科学研究第二十六号)、一九八四年九月
- 一七、金銭への適応——『葉蘭をそよがせよ』 (英文学第六十一号 (ジョージ・オーウェル特集))、早稲田大学英文学会編、一九八五年

- 一八、狭い世界、広い過去——『カタロニア讃歌』『空気を求めて』（早稲田人文自然科学研究第二十七号）、一九八五年三月
- 一九、自由と枠組——『動物農場』（早稲田人文自然科学研究第二十八号）、一九八五年十月
- 二〇、理想主義と自由意志——『尼僧への鎮魂歌』（英文学第六十二号〈ウイリアム・フォークナー特集〉）、一九八六年
- 二一、文学と政治の間で——戦時中のオーウェル（早稲田人文自然科学研究第二十九号）、一九八六年三月
- 二二、行為規準と忠実の観念——『ロード・ジム』（早稲田人文自然科学研究第三十号）、一九八六年十月
- 二三、文化の〈特殊〉と〈普遍〉——内村鑑三を中心に〔国際性と学際性〕（早稲田大学社会科学部創設二十周年記念論文集〈科学と現実〉）、早稲田大学社会科学学会編、一九八七年二月
- 二四、夢想と挫折——『オールメヤーの阿房宮』（早稲田人文自然科学研究第三十一号）、一九八七年三月
- 二五、理想主義と懐疑の精神——『ノストローモ』（早稲田人文自然科学研究第三十二号）、一九八七年十月
- 二六、日常性の再発見——『闇の奥』（早稲田人文自然科学研究第三十三号）、一九八八年三月
- 二七、日常性の危機——『密偵』（早稲田社会科学研究第三十七号・早稲田人文自然科学研究第三十四号合併号）、一九八八年十月
- 二八、成熟を阻むもの——『西洋の目を通して』（早稲田人文自然科学研究第三十五号）、一九八九年三月
- 二九、私の防衛論（翼第三十二号）、一九八九年九月
- 三〇、〈自然〉と〈作為〉（早稲田人文自然科学研究第三十六号）、一九八九年十月
- 三一、文化摩擦（早稲田人文自然科学研究第三十七号）、一九九〇年三月
- 三二、技法と主題——『影の線』（早稲田人文自然科学研究第三十八号）、一九九〇年十月
- 三三、諸国家性善説が国を滅ぼす——沙漠的人間の理解のために（かくしん第二四五号〈特集 この国は本当に大丈夫か？〉）、一九九一年一月
- 三四、仮構への意志——『文明の前哨基地』（早稲田社会科学研究第四十二号・早稲田人文自然科学研究第三十九号合併号）、一九九二年三月
- 三五、異質なものとの出会ひ——『天使も歩むを恐るるところに』（二十一世紀に向けて——転換期における学問）（早稲田社会科学研究第四十三号・早稲田人文自然科学研究第四十号合併号）、一九九一年十月

- 三六、文化の枠組み（早稲田社会科学研究所第四十四号・早稲田人文自然科学研究所第四十一号合併号）、一九九二年三月
- 三七、異文化理解——『インドへの道』（早稲田社会科学研究所第四十五号・早稲田人文自然科学研究所第四十二号合併号）、一九九二年十月
- 三八、芸術におけるコミュニケーション（早稲田社会科学研究所第四十六号・早稲田人文自然科学研究所第四十三号合併号）、一九九三年三月
- 三九、「可視的なもの」と「不可視的なもの」——『ハワズ・エンド』（早稲田人文自然科学研究所第四十四号）、一九九三年十月
- 四〇、「私」の再発見（早稲田社会科学研究所第四十八号・早稲田人文自然科学研究所第四十五号合併号）、一九九四年三月
- 四一、文化の枠組みと合理主義の限界（早稲田人文自然科学研究所第四十六号）、一九九四年十月
- 四二、文学における〈特殊〉と〈普遍〉（早稲田社会科学研究所第五十号・早稲田人文自然科学研究所第四十七号合併号）、一九九五年三月
- 四三、掛け替への無いものについて（ソシオサイエンス第一号）、早稲田大学大学院社会科学研究所科編、一九九五年三月
- 四四、作品としての政治——習俗の侵害を許してはならない（改革者第四一八号）、一九九五年五月
- 四五、限定と誠実（早稲田人文自然科学研究所第四十八号）、一九九五年十月
- 四六、静謐とコミュニケーション（早稲田人文自然科学研究所第四十九号）、一九九六年三月
- 四七、文化とナシヨナリズム（早稲田人文自然科学研究所第五十号）、一九九六年十月
- 四八、「私」を活かすといふ事（早稲田社会科学研究所第五十四号・早稲田人文自然科学研究所第五十一号合併号）、一九九七年三月
- 四九、知る事と理解する事（早稲田人文自然科学研究所第五十二号）、一九九七年十月
- 五〇、正気を求めて（早稲田人文自然科学研究所第五十三号）、一九九八年三月
- 五一、近代化と欧米化（早稲田人文自然科学研究所第五十四号）、一九九八年十月
- 五二、文化と教育（ソシオサイエンス第五号）、一九九九年三月
- 五三、結晶作用について（早稲田人文自然科学研究所第五十五号）、一九九九年三月
- 五四、自己肯定について（早稲田人文自然科学研究所第五十六号）、一九九九年十月

- 五五、自己表現について（ソシオサイエンス第六号）、二〇〇〇年三月
- 五六、異端と内的秩序（早稲田人文自然科学研究第五十七号）、二〇〇〇年三月
- 五七、文化の力——利潤動機を超えて（早稲田社会科学総合研究第一卷第一号）、早稲田大学社会科学学会編、二〇〇〇年七月
- 五八、束縛された個人——共同体への意志（早稲田社会科学総合研究第一卷第二号）、二〇〇一年一月
- 五九、ロマン主義と共同体（ソシオサイエンス第七号）、二〇〇一年三月
- 六〇、中央と周縁（早稲田社会科学総合研究第二卷第一号）、二〇〇一年八月
- 六一、狭さと深さ（早稲田社会科学総合研究第二卷第二号）、二〇〇二年一月
- 六二、共同体と感情の交流（ソシオサイエンス第八号）、二〇〇二年三月
- 六三、「所有」と「関係」（早稲田社会科学総合研究第三卷第一号）、二〇〇二年七月
- 六四、内発的に学ぶ（早稲田社会科学総合研究第三卷第二号）、二〇〇二年十一月
- 六五、〈特殊〉の存在理由（ソシオサイエンス第九号）、二〇〇三年三月
- 六六、「ハードパワー」と「ソフトパワー」（早稲田社会科学総合研究第三卷第三号）、二〇〇三年三月
- 六七、知識人と権力崇拜（早稲田社会科学総合研究第四卷第一号）、二〇〇三年七月
- 六八、思想と感情（早稲田社会科学総合研究第四卷第二号）、二〇〇三年十一月
- 六九、自己表現を亡ぼすもの（早稲田社会科学総合研究第四卷第三号）、二〇〇四年三月
- 七〇、青春と習俗（早稲田社会科学総合研究第五卷第一号）、二〇〇四年七月
- 七一、自然の秩序の転倒（早稲田社会科学総合研究第五卷第二号）、二〇〇四年十二月
- 七二、社会の再発見（早稲田社会科学総合研究第六卷第一号）、二〇〇五年七月
- 七三、国家と社会との両立について（早稲田社会科学総合研究第六卷第二号）、二〇〇五年十二月
- 七四、共同体と「経済主義的偏見」（早稲田社会科学総合研究第六卷第三号）、二〇〇六年三月
- 七五、中間的組織とグローバル自由市場（早稲田社会科学総合研究第七卷第一号）、二〇〇六年七月
- 七六、価値と「真理」（早稲田社会科学総合研究第七卷第二号）、二〇〇六年十二月